

お盆を過ぎましたが、連日、真夏日が続いております。リオオリンピックの放送もあり睡眠不足になりがちですが、体調が悪いと熱中症になりやすいので注意して下さい。さて、本日は、山口大学医学部附属病院第二外科准教授の吉野茂文先生をお迎えしました。後ほど、がんについての卓話をして頂きますのでよろしくお願い致します。吉野先生の前で恐縮ですが、今月も、田原ガバナーが地区方針とされているがんについての話をします。がんシリーズの第2回目は、男性のみがんである前立腺がんについてふれたいと思います。何分専門外でありますのでその点をご容赦願います。

近年、もっとも増加している男性のがんとして、前立腺がんが注目されています。2003年に、天皇陛下が前立腺がんで手術をされましたが、三波春夫さん、森喜郎元総理、渡辺恒雄読売新聞社長などの著名人が前立腺がんであることを公表され、マスコミでも取り上げられる機会が多くなりました。統計によりますと、2006年に前立腺がんと新たに診断された患者数は、年間約42,000人となり、胃がん、大腸がん、肺がんに次いで第4位と急速に増加してきています。前立腺がんは、欧米諸国では男性がんの中で大変多いがんとして知られており、とくに黒人、白人に発症頻度が高く、アメリカでは男性がんの中で罹患率は1位、死亡率は肺がんに次いで2位ともっとも多い男性のがんです。

日本でも、前立腺がん患者数は、急激に増加しております。1975年に前立腺がんを発症した患者さんは2,000人程度でしたが、2000年には約23,000人、2006年には約42,000人と急速に増加しており、2020年には78,000人以上となり、肺がんに次いで罹患数の第2位になると予測されています。平成17年度の厚生労働省の調査では、男性がんの中で患者数はすでに第1位となっており、年齢別では50歳代前半では第7位、60歳代前半では第2位、60歳代後半以降では1位のがんであり前立腺がんは高齢になるほど罹患率は増えていきます。

また前立腺がん死亡数も増え続けており、2009年の前立腺がんの死亡数は、10,036人と増加しており、男性の部位別がん死亡率では、肺がん、胃がん、大腸がん、肝臓がん、膵臓がん、食道がんに次いで第7位でした。死亡数は今後も増加し続け、2020年には2000年の約3倍になると予測されています。

前立腺がんと切っても切れない病気として前立腺肥大症があります。通常、前立腺がんは前立腺の外腺（前立腺の外側）から発生することが多いので早期にはほとんど症状がありません。進行してきますと排尿障害などの症状が出ますが、さらに進行して骨やリンパ節に転移して腰痛などの症状で発見されるこ

ともあります。これに対し、前立腺肥大症は、前立腺の内腺が肥大することによって、尿道が圧迫され排尿困難などの症状をきたす良性腫瘍です。前立腺がんと同じく、前立腺肥大症も年齢が高くなるにつれて増えていきます。

日本において、前立腺がんが急激に増えている主な理由としては、①食生活の欧米化（動物性脂肪の摂取の増加）②日本人の高齢化（平均寿命が延びたことによる高齢者の増加）③PSA検査の普及（早期がんの発見の増加）の3つがあげられます。PSA検査は、すでに皆さんもご存じと思いますが、前立腺がんのスクリーニング検査法です。PSAとは、前立腺特異抗原（すなわちProstate Specific Antigen）の略です。この腫瘍マーカーの開発により80～90%という高い確率で前立腺がんを見つけることができるようになりました。PSAは、前立腺の上皮細胞で作られる糖タンパクです。がんがあると血液中に流れ出るPSAの量が急激に増えてくるので、PSA値が高いと、がんが疑われます。PSA値は、年齢による基準値もありますが、4 ng/ml以下は陰性で、4.1 ng/ml～10.0ng/ml以下がグレーゾーンで、10.1 ng/ml以上が陽性です。

是非、これを機会に一度血液検査を受けて見て下さい。泌尿器科はもちろんですが、内科や外科でも検査は可能です。

本日は、最近増加傾向にある前立腺がんについてお話をしました。